

大学生の学習タイプの変容に関する探索的検討

— 半期の授業形態を参照しながら —

○野中陽一朗

(高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

問題と目的

大学生の学習時間は、学びの質を担保する指標の1つであり、授業外学習時間を促進する授業設計が求められている。しかし、大学生の主体性を重視するならば、授業外学習時間を単純に増加させる授業設計だけでは課題が残る。こうした中、畑野・溝上(2013)や野中(2016)は、主体的な学習態度の重要性を示し、学習時間という「学習の量」だけでなく、主体的な学習態度である「学習の質」といった両面からクラスター分析を用いて大学生の学習タイプを類型化している。こうした知見は、大学生の主体性を「学習の質」と「学習の量」から可視化するだけでなく、学習タイプに応じた支援を検討する上で重要となる。しかし、畑野・溝上(2013)や野中(2016)の学習タイプは、1時点の学習を顕在化したものであり、「学習の質」や「学習の量」は変容していくことも考えられる。

そこで、本研究では、大学生の過ごした半期の授業期間での変容に着目し、主体的な学習態度とされる「学習の質」、授業内学習時間、授業外学習時間、そして学生自身の自主的な学習時間とされる「学習の量」の両側面の変容から捉えた大学生の学習タイプの類型化を行うとともに、学習タイプごとの授業経験の頻度に差異が生じるかを探索的に明らかにすることを目的とする。

方法

実施手続きと調査協力者 調査は、講義の初回(T1)と最終回(T2)の2時点において、個人記入形式の質問紙を配付し、協力を承諾した者を対象に実施した。データ照合を行うため、学籍番号を記入するよう求め、T1とT2に回答し、マッチング可能であった158名を分析対象とした。

質問紙 (1)学習の質：畑野(2011)の「主体的な学習態度」1因子9項目(5件法;T1とT2の双方)。(2)学習の量：畑野・溝上(2013)の「大学で授業や実験に参加する(授業内学習時間)」、「授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする(授業外学習時間)」、「授業とは関係のない勉強を自主的にする(自主的な学習時間)」3項目(8件法;T1とT2の双方)。(3)授業経験頻度：畑野・上垣・高

橋(2015)の「アクティブラーニングの経験」1因子5項目(4件法;T2のみ)。本調査で実施した質問紙は、その他の尺度も含めて構成されている。本稿では、研究目的に合致する内容のみ記載した。

結果と考察

「学習の質」と「学習の量」を構成する「主体的な学習態度」、「授業内学習時間」、「授業外学習時間」、「自主的な学習時間」といった4変数の変容から学習タイプを類型化するため、T2とT1間の各変容得点を算出し、各変容得点に基づきクラスター分析(Ward法)を行った。その結果、解釈可能性から4クラスター解を採用した(Table 1)。

各クラスターの特徴として、人数比が最も高かったタイプ1は、授業外学習時間のみを維持した学習低下型と考えられる。タイプ2は、学習時間向上型と考えられる。タイプ3は、授業内学習時間を除外した学習の質と学習時間向上型と考えられる。タイプ4は、「学習の質」と「学習の量」を構成する4観点全てが最も低下したことから、留意すべき学習低下型と考えられる。なお、タイプ3を除く3つのタイプの主体的な学習態度が低下していた。本研究が射程に収めた学習タイプに立脚しつつ、学習向上に寄与する正課内外の活動を検討することが求められる。一方、タイプ4の大学生に対しては、正課の学びに取り組む意義や有効性を認識できる仕組みが必要となるだろう。

一方、授業経験頻度に対して、クラスターを被験者間要因とする分散分析を行った結果、効果がみられず($F(3,154)=0.61, p=.609 (\eta^2=.012)$)、各学習タイプを構築する上で授業経験頻度以外の要因の重要性も示唆された。そのため、今後は、大学生の学習タイプ変容に影響を及ぼす正課内外の要因について精緻化した検証が必要となる。

Table 1 クラスター分析による学習タイプ

	主体的な 学習態度	授業内 学習時間	授業外 学習時間	自主的な 学習時間
タイプ1(70)	-0.02	-0.26	0.00	-0.53
タイプ2(41)	-0.08	2.07	0.73	0.07
タイプ3(29)	0.05	-0.30	1.31	1.97
タイプ4(18)	-0.17	-3.33	-1.17	-0.67

()内は人数を示している。